豊かな人間関係を築き、共によりよく生きる生徒の育成
ー　道徳的実践力と人権感覚の育成を基にして　ー

秩父市立尾田蒔中学校

１　研究の主題について

（１）研究の主題設定の理由

本校は昨年度、埼玉県教育委員会から「道徳教育研究推進モデル校」の委嘱を受け「豊かな人間関係を築く生徒の育成」を目標として「彩の国の道徳」及び「人権感覚育成プログラム」を活用した道徳教育を推進して研究発表を行った。それは、①道徳教育の要である道徳の時間の充実をいかにして図ったか。②人権感覚を磨く学級活動をいかにして活性化させたかに主眼を置いた発表であった。今年度は、昨年度の取組をさらに発展させ、①教職員の道徳の授業力をいかにして向上とさせるか②どのようにして道徳教育の効果を高めていくか（家庭との連携）を取組の重点として道徳教育を推進してきた。

本校の生徒は明るく素直で、諸活動に前向きに取り組むことができるよさをもっている。「道徳的価値に基づいた生き方及び道徳的実践力」を意識した道徳教育を、家庭と連携しながら推進していけば、①自分の考えをしっかりともち ②自他の存在を大切にし ③よりよい人間関係を築き ④共に認め合いながら生きていこうとする生徒を育成できるのではないかと考え、本主題を設定した。

２　本年度の取組について

課題を解決するために、①授業研究部会、②実践力研究部会、③調査研究・広報部部会の３つの部会で全教員が分担して研究を進めた。

（１）授業研究部会の活動

ア　「彩の国の道徳」の効果的な活用

道徳の年間指導計画に、「彩の国の道徳『自分をみつめて』『心の絆』『学級づくりの羅針盤』」の活用を位置づけ、資料を積極的に活用した。

イ　指導案の作成及び指導方法の工夫・改善（「道徳の時間授業モデル」に基づく授業づくり）

学校全体で道徳の授業のレベルアップを図るため、授業モデルを作成した。研究部会を定期的に開き、よりよい授業づくりと指導力の向上をめざした。

ウ　家庭用「彩の国の道徳」等の活用

授業参観の際に家庭用「彩の国の道徳」等の活用による保護者参加型授業を実施した。

（２）実践力研究部会の活動

ア　「道徳コーナー」（掲示板）の設置、掲示の工夫

生徒たちの豊かな人間性を育む一助として、各学年に「道徳掲示板」を設置した。内容は、道徳の授業で使用した資料や詩、「心のノート」や「彩の国の道徳」、読みもの資料等を掲示した。また、行事や生徒会、委員会活動に取り組む生徒たちの写真等も掲示した。そして、各階の生徒用昇降口やトイレ等に様々な格言や名言を掲示し、常に生徒たちの目に触れさせ、心を耕し道徳的心情を養い、道徳教育の土台づくりに心がけた。

イ　体験活動の充実

体育祭や文化祭（合唱コンクール）、１学年の東京校外学習、２学年の林間学校・社会体験チャレンジ、３学年の修学旅行等の行事を道徳的実践の場と捉え、事前指導及び事後指導を充実させ、道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度を養うよう努めた。また、生徒会本部役員を中心に「あいさつ運動」や「クリーン作戦」、「ありがとうの手紙」等、奉仕活動も推進した。

ウ　「夢と豊かな心をはぐくむ講演会」の実施

障がい者スポーツの日本代表選手と競技を実体験し、そのレベルの高さやおもしろさを感じ取ることができた。日常生活について選手から直接説明を聞くことで、健常者の差異は生活方法だけであるということを知り。「夢に向かって努力する」ことの大切さに気づくことができた。

（車いすバスケットボール体験講座：ＮＰＯ法人パラリンピックキャラバン実行委員会）

エ　集会、行事、朝読書の充実

行事や定期的（毎週火曜日）に行われる集会（全校朝会、生徒朝会、学年朝会）において校長や職員による講話、生徒体験感想発表等を行った。スポーツ選手の成功例から身近な出来事まで、道徳的な視点で講話や発表を実施することができた。また、文化祭においては英語弁論や読書感想文の発表とともに、人権作文の発表を行った。そして、人権週間においては朝読書で人権作文の読書週間を設け各学年ごとに３週間にわたり実施した。

（３）調査研究・広報部会の活動

ア　調査活動

（ア）道徳の時間に関する生徒意識調査

全校生徒に、２８の項目に４段階で「現在のあなたに当てはまるものに〇をつけてください。」とアンケート調査を実施した。下位の項目には「夢や理想をもち、それに向かって前向きに生きている。」「目標をめざし、希望と勇気をもってやり抜こうとする強い意志がある。」「社会の役に立とうと思い、進んでよりよい社会の実現に努めようとしている」「自分を見つめ、良いところを積極的に伸ばそうとしている。」などがあった。これらの項目は将来のことについてや自身のことについての内容なので道徳の時間の中だけでなく進路学習などでも授業の題材として扱い、生き方について興味・関心を高めるために工夫していかなければならないことが分かった。

（イ）道徳の時間に関する保護者意識調査

保護者に、道徳の意識に関する調査を行った。①学校の教育で、力を入れて育ててほしい・身につけてほしい項目②家庭で、特に身につけさせるために力を入れている項目という問に対する解答の中に共通して「善悪の判断をして行動できる」ことが上位になっている。今後更に、道徳の時間に学んだことを、実践できるようにしていく工夫が必要である。

イ　広報活動

「道徳だより」により、家庭でも道徳教育について話をする機会を増やし、学校と連携して道徳教育を推進することを目的として広報活動を行った。内容は、道徳教育の目的や内容、道徳教育の取組内容、生徒や保護者の道徳に関する意識調査の結果などを掲載した。

《道徳だより６号抜粋》

３　成果と課題

（１）　研究の成果

ア　年間指導計画に「彩の国の道徳『自分をみつめて』・『心の絆』・『学級づくりの羅針盤』」を取り入れることで、自己の生き方について考えさせることができた。

イ　資料分析表の中に「生徒の思考の流れ」を表記することで、資料をより深く読み込せることができるようになった。

ウ　家庭用「彩の国の道徳」等を活用して、授業参観で保護者参加型の授業を行い、家庭との共通理解を深めることができた。

エ　研究主題の達成に向けて職員の意識が高まり、「団結」と「絆」を実感することができた。

（２）さらなる向上に向けて

ア　生徒の道徳的実践力の育成と人権感覚の育成に向けて、家庭との連携をさらに深めるとともに、連携の対象を「地域」へと広げていく。

イ　学校教育において、他の分野（進路・キャリア教育や特別活動等）と連動して「生き方指導」を推進し「自己理解」を深める指導を行っていく。（アンケート結果を生かす活動）

ウ　「すべての教員が自信をもって道徳の授業を行う」という目標の実現に向けて、本研究終了後も研修(授業研究、「授業モデル」のさらなる改善、道徳だよりの発行等)を継続していく。

（担当　教諭　関根　稔）

確かな学力の育成
ー　意欲を高めるための学習指導の工夫　ー

秩父市立高篠中学校

１　テーマ設定の経緯

元気な声であいさつができる。落ち着いた静かな態度で授業に臨める。来校した人たちが口をそろえて「いい生徒たちですね。」「落ち着いた学校ですね。」と評価する。今でこそ落ち着いているが、かつて本校は、授業中の徘徊行為、不登校が目立った。

授業中の徘徊者や不登校生徒を減少させ、落ち着いた静かな学校づくりとして最優先させたのが「確かな学力の育成」である。「わかる」という満足感、「できる」という充実感を抱かせることで学校に来て教室で勉強するというごくあたりまえの活動が身につく。

「わかる授業」「できる授業」を構築し、確かな学力を育成することで授業徘徊者や不登校生徒をなくしていくことを第一義に教職員一同研鑽に努めている。

２　「確かな学力の育成」に向けての取り組み

確かな学力を身につけるための土台となるのはなんといっても「授業」である。わかる授業、できる授業、喜びのある授業を構築していくためにはどうしたらよいか、そして何をしていけばよいかを研究し、実践し続けてきた。

さらに学習規律の確立のため生徒の自治活動を促進させ、校内の規律の徹底に努めた。教師主導ではなく、生徒が問題意識を持ち、主体的に改善していく方策と実践力を高めた。

以下に本校の研修の主たるものとして「確かな学力育成のための取り組み」と「授業規律や生活規律などの共通行動の実践」などを簡単に紹介する。

（１）　授業力向上研修の実践

「特別支援を要する子どもにとってやさしい（優しい・易しい）」授業は、すべての子どもにとってやさしい（優しい・易しい）授業である。」という理念のもと、特別支援コーディネーターを中心に校内研修に「特別支援教育」を組み込み、ＬＤ／ＡＤ、ＨＤ（注意欠陥多動性障害）・ＡＳ（広汎性発達障害）の子を伸ばす指導のポイントを理解し、障害理解と対応スキルを身につける研修を行っている。

特別支援教育の留意点を理解した上ですべての生徒にやさしい授業を展開するための方策として、学期１回の割合で模擬授業研修を行っている。授業をする視点と観察する視点とをはっきり明示し、先生と生徒の役とで模擬授業をとおしてスキルアップを図っている。

スキルアップのための視点の一部を以下にあげる。

ア　一度に出す指示は一つ。

複数の指示を同時にできないという特別支援教育の視点から１回の指示は１つにしぼり、簡潔に述べる。

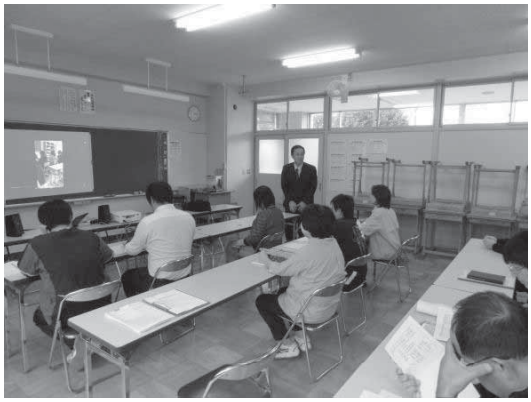
イ　無駄な言葉を発しない。

長々とした説明でなく、生徒の変容を促す言葉をかける。

ウ　発問･指示が明確で、全員に伝える。

発問、作業指示、活動、評価がスムーズに構成されている。そして大切なことや指示が全員に伝わっているか。

エ　空白時間をつくらない。



《校内模擬授業研修》

手持ちぶさたになる時間をつくらない。早く終えた子にも、作業の遅い子にも配慮があり、次に行うことを的確に指示する。

オ　指導の途中で何度か達成度の確認をする。

個々の作業の進度を教師がすべて把握している。

カ　リズムとテンポがある。

心地よいテンポで授業が進んでいく。緩急をつけたテンポで生徒をあきさせず、集中して授業に取り組めるようにする。

（２）授業規律や生活規律などの共通行動の実践

ア　教師主体による実践

「チャイムと同時に始まる授業」「学習用具がそろう授業」「生徒が姿勢を正し、集中して取り組む授業」の３つを一人一人の教師が毎時間徹底して行っている。

始業前と始業後に教師が教室にいることで生徒の授業準備は滞りなく進み、落ち着いた静かな態度で授業ができている。その結果として、学習課題や作業への取り組みに改善ががみられ、なだらかな勾配ではあるが学力が身についてきている。さらに、始業前と始業後に教師が教室にいることで、見守ってくれているという生徒の安心感と教師への親しみとが生まれ、良好な人間関係が形成され、学ぶ場にふさわしい環境がつくられている。

イ　生徒主体による実践

生徒自らが学校生活を見直し、中学生としてあるべき姿を考察し、学校の健全な姿を追究できるよう指導・援助している。生徒会本部役員と学級委員会とがタッグを組み、各学級や校内における問題点を定期的にレポートにまとめ、対策を練り、生徒が主体的に活動している。「チャイム席を守る」「他教室には出入りしない」「制服や体操服をきちんと着る」など、基本的なことを生徒と教師とで実践している。

（３）小学校との連携による実践

ア　中１ギャップの解消

小学校との連携を図り、できる限り児童・生徒一人一人に応じた学習指導や生徒指導を心がけ、円滑な中学校生活ができるようにしている。

イ　特別支援を要する児童・生徒の連携

音楽、体育といった小学校への出前授業やスクールカウンセラーや特別支援コーディネーターを通して児童の実態を把握し、生徒一人一人に応じた学力向上のため手段を講じている。

３　まとめ

平成２０年から６年間、一貫して「確かな学力の育成」をテーマに校内研修を継続している。「真剣に授業に取り組み、継続的に学習できる生徒」（本校のめざす生徒像）には、「質の高い教育を提供出来る教師」（本校めざす教師像）が必要不可欠である。質の高い教師への変化は質の高い生徒の変化を生み出す。授業規律の確立と実践。まじめな生徒が不利益を被らない正常な教室づくり。質の高い授業実践による質の高い生徒づくり――このようなことを基盤として本校の教育活動は展開されている。

特別支援教育を視野に入れながら教師が授業技量向上をしていることが本校のひとつの特長である。さらに、校内研修がそのまま生徒理解や学校づくりに寄与されていることが本校の最大の特長である。

落ち着いた静かな学校になった今だからこそ、さらに質の高い授業を展開し、より「確かな学力」を身につけさせることが今後の課題である。

（担当　教諭　阿保明夫）

「個に応じたわかりやすい授業の創造」
ー　学習意欲を高めるための授業改善と学習環境の整備を通して　ー

秩父市立大田中学校

１　研究主題設定の理由

生徒一人一人に生きる力を身に付けさせることは、学校の使命である。将来社会に出た時に、自分自身の考えをしっかりと持ち、主体的に働くためにも、各教科の学習に意欲的に取り組ませたい。しかし、生徒一人一人を見ると、課題を抱えている生徒も見受けられる。課題を解決するためには、学習に取り組む態度の指導を含めた学習環境を整備し、生徒一人一人に目を向けた特別支援教育の視点に立ったわかりやすい授業を展開する必要がある。そこで、昨年度より、校内研修の研究主題を「個に応じたわかりやすい授業の創造」とし、授業研究会による授業改善、学習環境の整備などに取り組んできた。特に、見通しをもたせるための学習課題の提示や板書の工夫、指示や助言の仕方、支援の在り方等の研究を進めてきた。

今年度は昨年度の研究の成果を生かしながら、学習に取り組む態度や学習規律などの指導を含め、わかりやすい授業を展開することで研究主題に迫りたい。

また、昨年度から実施しているワークショップ型の研究協議を行うことで、積極的な情報交換を行い、校内研修の充実に努める。

２　研修内容・方法

全職員が必ず１回は授業を公開し、「ここ見てシート」（略案）をもとに、研究主題に焦点を絞った研究協議を実施する。要請訪問では、ワークショップ型の研究協議を取り入れる。また、資質向上研修も行い、特別支援教育の視点に立った事例研修や方策等、専門的な立場の指導者からご指導をいただく研修を実施する。さらに、今年度から「管理職授業訪問」を毎月実施し、指導法の工夫・改善の一助とする。

３　本年度の取組

（１）授業研究会における学習意欲を高めるための指導法の工夫等

月　日	教　科	単　元　名	学習意欲を高めるための指導法の工夫等
５／２０	理　　科 ３年１組	化学変化と電池	・冒頭に演示を行い、生徒の興味・関心を高める。 ・グループでの学び合いを取り入れ、理解を深める。
	総　　合 １年１組	スキル学習	・授業の流れや学習のめあてがわかる板書を工夫する。 ・身に付けたスキルが生活で役立つことを認識させる。
６／１７	数　　学 ３年１組	平方根	・プロジェクター（視聴覚機器）を活用する。 ・学習内容や学習の手順について、見通しを持たせる。
	保健体育 １年１組	バスケットボール	・授業の流れや学習のめあてがわかる板書を工夫する。 ・役割を明確に理解させるための資料を提示する。
７／　９ 要請訪問	英　　語 ２年２組	英語で話そう	・ＡＬＴへのインタビューを取り入れる。 ・生徒の理解や反応を確かめながら進める。
９／　２	英　　語 ２年１組	Ｅｎｊｏｙ　Ｓｕｓｈｉ	・ペア学習から全体でのゲームに発展させる。 ・話す活動を書く活動につなげていく。
	学級活動 １年１組	スキル学習	・授業の流れや学習のめあてがわかる板書を工夫する。 ・発表機会を多く設定し、生徒の気づきを大切に扱う。
11／18 要請訪問	国　　語 １年１組	竹取物語	・スピーチや話し合いなど、言語活動を充実させる。 ・「書くこと」について、指導と評価を一体化して行う。
１２／９	学級活動 ３年１組	進路学習	・全員が意見を発表できる機会を設定する。 ・お互いの意見を認め合える支持的な雰囲気をつくる。

（２）研究主題に迫るための実践・指導法の工夫等

教科等	研究主題に迫るための実践・指導法の工夫等
国　　語 （黒沢　愛里）	・導入を工夫する（例：【文法】「宇宙人からの手紙」）。 ・短冊や筆書きなどの視覚に訴える板書を行う。 ・暗唱カードを活用する（古典）。 ・「書く」課題の学習後、優良作品をＡ４版１枚程度にまとめて配布する。
社　　会 （坂本　朋隆）	・授業のはじめ・終わりのあいさつ、忘れ物等の確認を徹底する。 ・ワークシートを工夫し、学習の振り返りができるようにする。 ・前時の学習内容の定着を図るための小テストを実施する。基準に満たない生徒には、再テストを実施する。
数　　学 （青木　寿夫）	・ICT を活用し、言葉だけでなく図や表などの視覚に訴えた授業を展開する。 ・生徒に発言させる場面等では、つまずいている友達に教え合ったり、間違って答えた生徒にも気配りしながら指摘できるような人間関係づくりを目指す。
理　　科 （町田　翔平）	・授業の冒頭において、演示実験を行うことで課題意識をもたせる。 ・身近な教材を用いることで、興味・関心を高める。 ・グループ活動における役割をあらかじめ明確に分担する。 ・学習内容の定着を図るために、個に応じた課題を用意した。
英　　語 （北　　武）	・１時間の授業で身に付けさせたい内容を明示する。 ・個人差に対応するため、ワークシートを工夫した（難易度別）。 ・視聴覚教材を活用する。 ・ＡＬＴとの会話活動を充実させる。
音　　楽 （斉藤まり子）	・ワークシートの工夫・活用を図る。 ・授業の目標の明示など、効果的な板書を工夫する。 ・授業の振り返りとして、自己評価を行う。 ・個別指導の充実を図る。
保健体育 （熊崎　英雄）	・器械運動：視聴覚機器を使い、課題を明確にする。 ・陸上競技：個に応じた目標を設定する（幅跳び・高跳びの標準記録設定）。 ・体つくり：体力を高める必要性を理解させ、日々の生活の中に位置づける。個別指導や声かけを意識して授業を行う。
保健体育 （芝　喜久美）	・授業の始めに学習の目標と内容を示して、個々の生徒の学ぶ意識を高める。 ・教材は生徒の実態に合わせ、視覚と聴覚など、身体の感覚を働かせて、体感しながら理解できるようにする。
特別支援 （齋藤　佳子）	・短期記憶が長期記憶になるよう基礎的・基本的内容を繰り返し行う。 ・五感を生かして、聴いて見て感じて実際に自分で動いてなど、身体を生かしながら楽しく学習する。 ・インタビューや話し合いなど、人との関わりを大切にできる活動を入れる。

４　本年度のまとめ

（１）成果

ア　昨年度から継続して取り組んできた板書の工夫が実践できた。特に、学習に見通しをもたせるための目標の明示は定着した。

イ　生徒が主体的に活動しながら学ぶ授業が増えてきた。ペア学習やグループ学習などの学習形態の工夫も多く見られるようになった。

ウ　全職員が必ず１回は授業を公開することにより、指導方法の工夫・改善につながった。その際、学習指導案や「ここ見てシート」（略案）に研究主題に迫るための指導法の工夫等を明記することで、参観するポイントが明確になり研究協議も深まった。

エ　要請訪問にワークショップ型の研究協議を取り入れることにより、研究主題の視点に基づく話し合いが活発なものとなった。

（２）課題

ア　ペア学習やグループ学習の方法を、教科の枠を超えて共通に行えると生徒の活動もよりスムーズになり学習効果の向上も期待できる。

イ　小中の学びの継続性をより重視する必要がある。学校行事での連携だけでなく、授業での連携や学年ごとの学習内容の把握など、９年間を見通した指導をより確実なものにする必要がある。

（担当　教諭　熊崎英雄）